「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0856 ◆◆◆

25/09/03

【 7月の月間変動が今年最小、結果「円の復権」は失敗に 】

先週末で終了した8月のドル/円相場は、月間変動幅が4.70円(146.22-150.92円)となり、3月の同4.75円をわずかに下回り、今年の月間最小変動を記録した。7月の変動が8.15円を記録し、ユーロを主役とした価格変動から再び円絡みの変動に戻る「復権」が期待されていたものの、結果的には失敗に終わったと言ってよい。

そうしたなか、筆者が過去に遡って調べてみたところ、歴代のドル/円は年明けから半年程度をメドに「年間の最高値と最安値をともにつける」ことが非常に多い。つまりは、年末に向け少しずつ動意が乏しくなる傾向がまま見受けられるのだが、今年は果たして如何に。足もと9月に「復権」の動きが観測されないようだと、来月以降ますます小動きをたどることになりかねない気もしないではない。

◎「ハリケーン・シーズンは荒れ易い」のジンクスに期待したいが…

今回の当レターでは、月初の恒例となっている過去の経験則を参考に、月間見通しを以下で考えて見たい。

まずは、1990年以降昨年まで過去35年間の当9月相場の勝敗表を調べてみると、19勝16敗だった。若干ドル高有利ではあるが、率換算では6割にもとどいておらず、ほぼ五分に近い。大きな特徴とは言えないだろう。

方向性と言うことでは特徴に欠ける9月相場だが、別の大きな特徴が見られている。それは「ほかの月に比べて大きな値幅が観測される」と言うことだ。

実際に過去の9月相場の変動を幾つか取り上げると、その典型例は月間に11.15円動いた(年間3位の大変動、以下同)1998年のケースだろうが、そのほかでも1999年の8.20円(同4位)、2002年の7.41円(同4位)、2003年の7.63円(同1位)、2005年の4.94円(同2位)、2014年の5.76円(同4位)、2017年の5.94円(同2位)などといったように枚挙に暇がない。年間トップではなく、2-4位クラスの大きな変動をたどることが確かに多く観測されていた。

なお、昨年も年間順位とすれば7位と中位ながら、月間変動は7.62円。昨年と同じ程度動けば、今年は「復権」と言えるのだが、果たしてどういった展開をたどるのだろうか注目だ。

翻ってみると、為替に限らず金融市場のジンクスとして、「ハリケーン・シーズンの為替相場は荒れ易い」と言われることが少なくない。そして、日本気象協会の発表によると、先日台風14号が発生したという。日本への直接的な影響はない見込みだが、9月トータルで見た予想は「発生数そのものはほぼ平年並みだが、接近数は9月から10月にかけて平年並みが多い」と見込んでいるという。これが現実のモノとなるようだと、為替市場も荒れた値動きをたどっても不思議はないのかもしれない。期待半分で指摘しておこうと思う。

一方、為替の動きは一旦棚上げし、過去の9月をニュースの視点でみてみると、何故か金融関係の大事件の起こりやすいことが知られている。

実際に幾つか例を挙げると、「プラザ合意(1985年)」を筆頭に、「いわゆるブラック・フライデーが起こる(1986年)」「英ポンドと伊リラがERMと呼ばれた当時の欧州通貨のバンド制から離脱(1992年)」「大手ヘッジファンドLTCMの巨額損失発覚(1998年)」「リーマンブラザーズ破たん(2008年)」などとなる。また2022年の9月22日には、あの23年ぶりとなる政府・財務省の2.8兆円規模「ドル売り・円買い介入」も実施されていた。

さらに、金融に直接関係ない「大事件」も少なくない。こちらも実例を挙げれば、古くは「関ヶ原の戦い(1600年)」や「清英でアヘン戦争(1839年)」「マッキンレー米大統領狙撃事件(1901年)」「日露戦争終結(1905年)」「第二次世界大戦はじまる(1939年)」など。比較的最近では「イラン・イラクが全面戦争へ(1980年)」「米国同時多発テロ(2001年)」が、やはり9月に起こっている。

もちろん、上記のような出来事は毎年確実に起こるというわけではないし、今年確実に起こるという保証も